

ア施設の情報がほしい」「病院ごとの手術件数など、治療方法ごとにまとめた実績（新聞でたまに見かける）を5～10年分くらい載せてもらいたい」「再発治療に関する情報、再発患者で話ができる患者会、講演会やフォーラムの情報」など様々な意見があがった。

これらの患者意見を神奈川県療養情報を作成する際の資料としてフィードバックすることができた。この地域版は、神奈川県保健福祉部健康増進課が作成したものであるが、本研究の内容の一部が情報として使用されている。

(図2参照)

D 考察

地域がん診療連携拠点病院において患者必携の普及を図る目的で、神奈川県のがん対策の状況とそれに伴う神奈川県立がんセンターの対応状況の検討と可能性の検証を行った。その結果、神奈川がん臨床研究・情報機構が組織化されがん情報センターが一般的ながん患者支援を行っており、この機構の活用によって患者必携の普及が図られるものと思われた。

E 結論

都道府県がん診療連携拠点病院としての神奈川県立がんセンターにおいては、全県のがん患者支援を目指して、電話相談やがん情報の提供を行っているが、「がんになったら手取るガイド」(患者必携)の活用推進も行っている。これらの活動ががん患者さんの治療や予後、あるいはQOL向上に役立つことを願っている。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

論文

1. Miyagi Y, Higashiyama M, Gochi A, Akaike M, Ishikawa T, Miura T, Saruki N, Bando E, Ki-

mura H, Imamura F, Moriyama M, Ikeda I, Chiba A, Oshita F, Imaizumi A, Yamamoto H, Miyano H, Horimoto K, Tochikubo O, Mitsu-shima T, Yamakado M, Okamoto N: Plasma Free Amino Acid Profiling of Five Types of Cancer Patients and Its Application for Early Detection. PloS ONE 6(9), e24243, 2011

2. 岡本直幸:「アミノインデックス技術」を用いたがんリスクスクリーニング、人間ドック 26(3): 454-466, 2011
3. 岡本直幸: がん登録の来し方～歴史を知る、J A C R Monograph 17:1-5, 2012

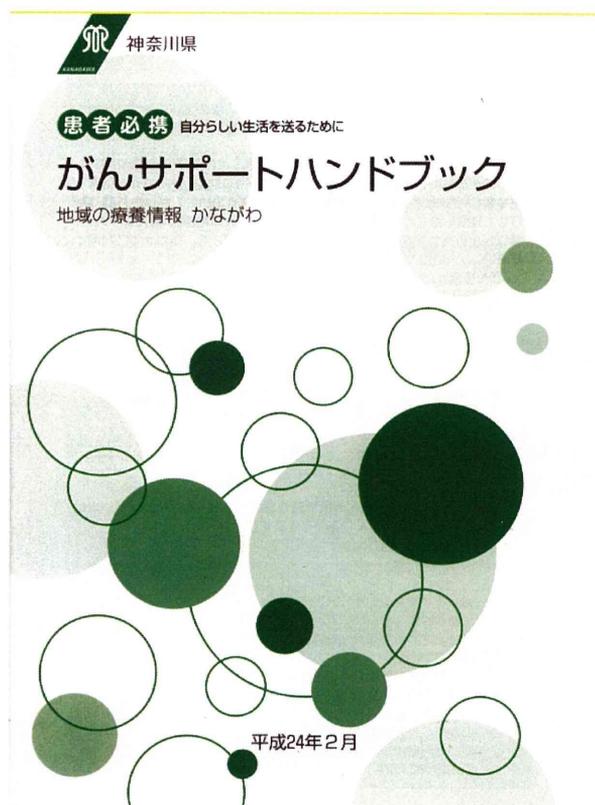


図2 患者必携地域版(神奈川県)

4. 片山佳代子、夏井佐代子、岡本直幸: 神奈川県内における乳がん罹患の地域集積性の検討、J A C R Monograph 17:51-52, 2012

学会発表

1. 片山佳代子、岡本直幸: がんの相談支援に関する研究－神奈川がん臨床研究のがん電

- 話相談内容の分析－. 第 21 回日本疫学会
学術総会 2011.1 札幌
2. 片山佳代子, 助友裕子, 黒沢美智子, 横山和仁, 岡本直幸, 稲葉裕: 都道府県別乳がん死亡率とソーシャルキャピタルの関連 (2). 第 81 回日本衛生学会総会 2011.3 東京
 3. 片山佳代子, 岡本直幸: メッシュ法によるがん罹患および死亡リスクと社会経済指標の関連性に関する研究. 第 18 回がん予防学会, 第 34 回日本がん疫学, 分子疫学研究会, 2011.6 京都
 4. KATAYAMA K, OKAMAOTO N: Analysis of Cancer telephone consultation by Grounded Theory Approach. 第 70 回日本癌学会学術総会, 2011.9 名古屋
 5. 片山佳代子, 夏井佐代子, 岡本直幸: 神奈川県内における乳がん罹患の地域集積性の検討. 地域がん登録協議会第 20 回学術集会, 2011.9 千葉
 7. 八巻知香子, 高山智子, 田尾絵里子, 小郷祐子, 神田典子, 岡本直幸, 唐渡敦也, 大松重宏, 小川朝生, 加藤雅志, 石川睦弓, 片山佳代子: 相談支援センターの体制と機能に関する研究. 第 49 回日本癌治療学会学術集会 2011.11 名古屋
 8. 片山佳代子, 稲葉 裕, 岡本直幸: がん患者の支援システムの構築に関する研究－GTA によるがん電話相談内容の分析－. 第 76 回日本民族衛生学会総会, 2011.11 福岡
 9. 片山佳代子, 助友裕子, 稲葉 裕, 岡本直幸: GIS を利用したがん罹患状況と社会経済的要因との関連－メッシュ法による地域がん登録データの応用－. 第 76 回日本民族衛生学会総会, 日韓国際ワークショップ, 2011.11 釜山
- H. 知的財産権の出願・登録状況
- 1 特許取得
なし
 - 2 実用新案登録
なし
 - 3 その他
なし

分担研究報告（元雄）

厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業
平成 23 年度　分担研究報告書

石川県能登地区における自立支援型がん情報の評価と普及に関する研究

研究分担者　元雄良治　金沢医科大学腫瘍内科学教授

本研究の目的は、金沢医科大学病院が担当している石川県能登地区のがん医療の現状と問題点を把握し、能登地区がん診療連携協議会および北陸がんプロフェッショナル養成プログラムなどの活動と連動して、地域の医療機関との連携を強化し、また市民公開講座などで一般市民に情報を提供して、自立支援型がん情報の評価と普及を図ることである。

A.研究目的

金沢医科大学病院（以下当院）が担当している石川県能登地区は、住民の高齢化・独居老人の増加・医療機関へのアクセス不足・がん専門医の不足などの問題点を抱えている。また看護師などの医療スタッフの不足も深刻である。当院を受診する患者の多くは能登地区に在住している。本研究では、能登地区におけるがん医療の現状と問題点を把握し、当院が主催している能登地区がん診療連携協議会や当院がん看護専門看護師が中心に開催している能登地区看護師セミナー、および北陸がんプロフェッショナル養成プログラム（以下北陸がんプロ）などを通して、能登地区の医療機関との連携を強化し、自立支援型がん情報の評価と普及を図ることを目的とした。今年度は「患者必携」を配布し、アンケートを実施した。

B.研究方法

当院およびがん診療連携協力病院である公立能登総合病院と恵寿総合病院が開催している能登地区がん診療連携協議会・研修会などを振り返り、今後の方向性を探った。また「患者必携」配布とアンケート調査の現状について解析

した。

（倫理面への配慮）

とくに必要としなかった。

C.研究結果

平成 23 年度能登地区がん診療連携協議会は平成 23 年 10 月 1 日に金沢駅東口のホテル金沢で開催された。小坂健夫副院長の挨拶のあと、河北中央病院（石川県津幡町）におけるがん医療への取り組みと課題について松下栄紀同院長から紹介があった。次に今年度新しく石川県から指定されたがん診療連携推進病院・協力病院について元雄が紹介した。推進病院の芳珠記念病院（能美市）の上田博院長、協力病院の恵寿総合病院（七尾市）の鎌田徹副院長、公立能登総合病院（七尾市）の牛島聡副院長が挨拶された。小坂健夫副院長が地域連携パスも含め、「がん治療連携計画策定料」や「がん治療連携指導料」について説明した。最後に本年 5 月に当院で開催された石川県医師に対する緩和ケア研修会について麻酔科の土田英昭教授が報告した。最後に今後の協議会の開催時期や会場について提案があり、協議会を終了した。続いて、午後 4 時から 5 時 20 分まで第 39 回がん診

療連携拠点病院研修会が行われた。講師は川崎医科大学臨床腫瘍学の山口佳之教授で、「癌化学療法の進歩、新規免疫療法、そして緩和ケア—がんは克服できるか—」と題した講演があった。Kawasaki Clinical Oncology (KASCO)と命名された川崎医科大学病院でのがん医療への取り組み、がん化学療法（とくに大腸癌）の進歩と安全な実施のための具体的なコツ、腫瘍縮小は少ないけれども予後延長に貢献するがんワクチンを中心とする新免疫療法の現状と展望、緩和ケア（とくに在宅緩和ケア）、と広範な内容で、最後に「我々は共に学び、プロとなって、職種・立場を越えてスクラム組んで同じ方向を向き、すべての患者・家族の希望に寄り添えるよう、顔の見える関係づくり、地域がん診療連携を確立して行こうではないか」と結ばれた。

また平成24年3月24日第8回となる能登地区がん診療連携協議会が開催された。公立穴水総合病院におけるがん医療への取り組みと今後の地域連携について倉知圓同院長から紹介があった。次に今年度石川県がん診療連携協議会の報告が元雄からあった。当院一般・消化器外科の木南伸一准教授が「私のカルテ」運用について説明した。平成23年6月2日～3日にいこいの村能登半島（志賀町）で予定されている、当院主催・2つの協力病院（恵寿総合病院・公立能登総合病院）共催の、石川県がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会について当院麻酔科・緩和ケアチームの小川真生講師が説明した。最後に平成23年9月に当院に開設した「患者サロン」について当院地域医療連携課・緩和ケアチームの神島文代ソーシャルワーカーが紹介した。続いて、午後4時15分から5時30分まで第50回がん診療連携拠点病院研修会が行われた。講師は県立広島病院臨床腫瘍科主任部長の篠崎勝則先生で、「臨床腫瘍科における外来化学療法と在宅ケア支援に関する取り組みと今後の展望」と題したご講演であっ

た。広島県の現状と石川県との比較、化学療法の状況（外来18床、入院18床、臨床腫瘍科医師4名全員がん薬物療法専門医）、化学療法の有害事象コントロール（制吐薬としてのデキサメサゾンの使用法、発熱性好中球減少症への対応など）、在宅緩和ケア地域連携事業における後方支援病院としての役割、在宅ケアチーム形成、地域完結型のがん医療・介護サービスの提供、など本研修会の目的にふさわしい内容のご講演であった。化学療法でのレジメン決定のプロセス、ポートを使わないで化学療法を継続するコツ、糖尿病を有するがん患者でのデキサメサゾン使用などについて、今回会場をご提供頂いたがん診療連携協力病院である恵寿総合病院の鎌田徹副院長および同じく協力病院である公立能登総合病院の牛島聡副院長から質問があった。

平成24年1月から「患者必携」を配布し、アンケート調査を開始した。「患者必携」を患者さんにお渡したときの患者さんの反応はおおむね良好で、「このような研究をして頂けるのはありがたい」、「立派な本ですね」などの好意的な意見が聞かれた。一方、「まだこの本を読むほど心理的に回復していない」、「難しい本は御免だ」などと言って拒絶された患者さんもいた。今後アンケート結果を解析する予定である。

D. 考察

能登地区がん診療連携協議会は平成19年度より毎年2回（3月、9月）に能登中部・北部の病院・診療所・医師会が参加する協議会であり、各病院の現状をシリーズで紹介して頂き、国レベル・県レベルの最新の情報を共有している。またそのあとにがん診療連携拠点病院研修会を開催し、がん医療専門の医師・看護師に講演を頂いてきた。

今年度は「患者必携」の配布を開始したこと

もあり、今後の解析結果が待たれる。

E.結論

石川県能登地区では金沢医科大学病院との密接な医療連携を取っており、今後「患者必携」を用いた自立支援型がん情報の評価と普及が期待される。

F.健康危険情報

なし

G.研究発表

1.論文発表

- 1) Motoo Y: Traditional Japanese Medicine in the multidisciplinary approach to cancer. *J Trad Med*, in press.
- 2) Motoo Y, Xia QS, Nakaya N, Shimasaki T, Nakajima H, Ishigaki Y. Stress Responses of Pancreatic Cancer Cells and Their Significance in Invasion and Metastasis. In: Kwang-Sup Soh, Kyung A Kang, David K. (eds), "The Primo Vascular System: Its Role in Cancer and Regeneration", Springer, New York, etc. 213-217, 2012.
- 3) Shimasaki T, Ishigaki Y, Nakamura Y, Takata T, Nakaya N, Nakajima H, Sato I, Zhao X, Kitano A, Kawakami K, Tanaka T, Takegami T, Tomosugi N, Minamoto T, Motoo Y. Glycogen synthase kinase 3 β inhibition sensitizes pancreatic cancer cells to gemcitabine. *J Gastroenterol*. 2011 Nov 1. [Epub ahead of print]
- 4) Motoo Y, Seki T, Tsutani K. Traditional Japanese medicine, Kampo: its history and current status. *Chin J Integr Med*, 2011 Feb; 17(2): 85-87.
- 5) Motoo Y, Shimasaki T, Ishigaki Y, Nakajima H, Kawakami K, Minamoto T. Metabolic disorder, inflammation, and deregulated molecular pathways converging in pancreatic cancer development: Implications for new therapeutic strategies. *Cancers*,3(1), 446-460, 2011.
- 6) 元雄良治. 第4章 治療各論 G その他-5 がん. 日本伝統医学テキスト. 医学書院、印刷中.
- 7) 守屋純二, 山川淳一, 元雄良治. I. 日常診察でまず使ってみたい漢方ベストチョイス 15: がん化学療法副作用緩和 (末梢神経障害) - 牛車腎気丸. *診断と治療*, 2011; 99(5): 829-833
- 8) 津谷喜一郎, 新井一郎, 元雄良治. 漢方医学の理解のために漢方とエビデンス-日本東洋医学会 EBM 委員会の活動を主に. *からだの科学【増刊】 これからの漢方医学*, 2011; 45-48
- 9) 山川淳一, 守屋純二, 元雄良治. 特集・漢方による消化器疾患治療のポイント-日常臨床でどう使いこなすか- : 肝胆膵疾患. *消化器の臨床*, 2011; 14(3): 290-294
- 10) 守屋純二, 山川淳一, 元雄良治, 竹内健二. 頻回手術後の多愁訴に対して漢方治療が有効であった1症例. *痛みと漢方*, 2011; 21: 115-117
- 11) 山川淳一, 守屋純二, 元雄良治, 飯塚秀明. 三叉神経痛による不定愁訴に真武湯が有効であった1例. *脳神経外科と漢方講演記録集*, 2011; 290-294
- 12) 元雄良治, 黒岩祐治. 特集 I Part. II 対談:21世紀型チーム医療と漢方. *漢方医学*, 2011; 35(3): 212-221
- 13) 元雄良治. 第28回和漢医薬学会: 和漢薬の科学的検証さまざまな疾患で新たな研究成果. *Medical Tribune*, 44(43): 28-29, 2011.

2.学会発表

国際学会

- 1) Motoo Y. Proposal of comparative analysis of

herbal medicines among CJK and alignment of the ICTM Herbal Interventions with other international initiatives. WHO ICTM TAG Classification of Interventions, (Hong Kong SAR, China, 2 Apr. 2011).

- 2) Motoo Y. Chemotherapy for pancreatic cancer: molecular analysis and clinical application. "Asian Oncology Summit 2011" GI Symposium 3, (Hong Kong SAR, China 9 Apr. 2011).
- 3) Motoo Y. Japanese viewpoint of ISO/TC249. The Second Plenary Meeting of ISO/TC249, (The Hague, the Netherlands, 2 May 2011).
- 4) Motoo Y. Pancreatic cancer: experimental sensitization to gemcitabine and patient care with traditional Japanese medicine. International Conference on Cancer Prevention, (Seoul, Korea, 26 Aug. 2011).
- 5) Motoo Y. Evaluation of Japanese clinical practice guidelines based on Kampo descriptions. Guidelines International Network Conference 2011, (Seoul, Korea, 29 Aug. 2011).
- 6) Motoo Y, Arai I, Tsutani K. Evidence Reports on Kampo Treatment (EKAT). The First International Symposium for Japanese Kampo Medicine, (Munich, Germany, 25 Nov. 2011).
- 7) Motoo Y, Arai I, Hakamatsuka T. Japanese viewpoint on ICTM Interventions. Informal Consultation on Interventions Modeling, (Geneva, Switzerland, 12 Dec. 2011).

国内学会

- 1) 守屋純二, 山川淳一, 竹内健二, 元雄良治. 線維筋痛症が疑われた疼痛性疾患に駆瘀血剤、清熱剤が有効であった1例, 第24回日本疼痛漢方研究会学術集会, (東京 2 Jul. 2011).
- 2) 元雄良治. 漢方と国際標準化機構(ISO): 日本の対応. 夏休み特別企画 2011: 漢方医学

特別セミナー, (金沢, 12 Jul. 2011).

- 3) 元雄良治. 和漢薬臨床研究の最前線: がん診療への和漢薬の応用: 臨床的エビデンスを求めて. 第28回和漢医薬学会学術大会, (富山, 28 Aug. 2011).
- 4) 元雄良治. がん医療における東西医学の融合. 鳥取漢方学術講演会, (鳥取, 16 Sep. 2011).
- 5) 元雄良治. がん医療における漢方のエビデンス. 第3回 KAMPO & EDUCATION SEMINAR~漢方のEBMと医学教育の充実~, (大阪狭山, 18 Oct. 2011).
- 6) 山川淳一, 守屋純二, 元雄良治, 飯塚秀明. 薬剤乱用頭痛の離脱に桃核承気湯が有効であった1例, 第20回日本脳神経外科漢方医学会学術集会, (東京, 5 Nov. 2011).
- 7) 元雄良治. がん医療における東西医学の融合~外来化学療法を中心に~. がん化学療法における漢方, (弘前, 18 Nov. 2011).
- 8) 元雄良治. 現代がん医療における漢方の役割. 第2回漢方セントレアシンポジウム, (常滑市, 28 Jan. 2012).
- 9) 元雄良治. 現代がん医療における漢方の役割. 群馬大学医学部附属病院患者支援センター第1回地域連携講演会, (前橋, 21 Feb. 2012).
- 10) 元雄良治. 集学的がん治療と漢方: 支持療法としての役割. 平成24年3月16日 (島根呼吸器・がん化学療法漢方講演会, (出雲, 16 Mar. 2012).
- 11) 元雄良治. がん医療における漢方の役割. Science of Kampo Medicine~がん化学療法における支持療法としての役割~, (福岡, 17 Mar. 2012).

H.知的財産権の出願・登録状況 (予定も含む)

- 1.特許取得
なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし

分担研究報告（山口）

厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業
平成 23 年度 分担研究報告書

地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立 ー倉敷での活動ー

分担研究者 山口佳之 川崎医科大学臨床腫瘍学 教授

岡山県倉敷地域での地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立に向け、緩和ケアフォーラム in 岡山という組織を立ち上げ、顔の見える関係づくりに着手している。今回、2011 年の活動をまとめた。地域がん診療連携拠点病院、中規模病院、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーション、ケア・マネージャー等、それぞれの立場における活動が明らかとなるとともに、それらをいかに有機的につなげるか、今後の課題が明らかとなった。

A. 研究目的

がん患者および家族の不安を払拭し、治療・療養・ケアの切れ目ない提供を確保するためには、地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立が急務である。われわれは、2007 年 8 月に緩和ケアフォーラム in 岡山という組織を立ち上げ、地域がん診療連携拠点病院を中心に、地域の中核病院、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーションの参加を得、症例検討と教育講演を実施しながら、地域における顔の見える関係づくりに着手している。今回、2011 年の成果を報告する。

B. 研究方法

2 年 4 回、1 月、4 月、8 月および 11 月に開催し、地域がん診療連携拠点病院を中心に、地域の中核病院、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーションよりそれぞれの活動を報告し、症例検討と教育講演を交え、域一体型緩和ケアネットワークの確立に向けて議論した。

C. 研究結果

毎回 80 名～120 名の参加を得た。

第 15 回緩和ケアフォーラム in 岡山は

2011.1.26、「今後の地域一体型緩和ケアネットワークの確立に向けて」というテーマで、倉敷第一病院 竹内 龍三 先生の司会のもと、地域がん診療連携拠点病院から川崎医科大学臨床腫瘍学 教授 山口佳之が、地域の中核病院として倉敷第一病院 緩和ケア内科 福田展之先生が、地域の診療所としてイマイクリニック 院長 今井 博之先生およびつばさクリニック 院長 中村 幸伸先生が、訪問看護ステーションとして倉敷しげい訪問看護ステーション 看護課長 大野 幸恵先生が、それぞれ発表した。

第 16 回緩和ケアフォーラム in 岡山は 2011.4.27、あいあいえん診療所 院長間木啓史郎先生の司会で一般演題 2 題、「在宅緩和ケアに携わる訪問看護師の困難感」が倉敷第一病院 緩和ケア病棟から、「患者の希望を叶える為の様々な家族状況に応じた看護介入の実際～がんターミナル期における患者・家族の QOL 充実を目指して～」が NHO 南岡山医療センターから、それぞれ発表された。問題点は、大病院の『敷居の高さ』であった。また、川崎医科大学 精神科学 教授 山田了士先生の司会で教育講演「当院での在宅緩和ケアの実際」がももたら

う往診クリニック院長 小森 栄作先生から発表され、当該施設の情報と知識の共有が達成された。

第 17 回緩和ケアフォーラム in 岡山は 2011.8.10、川崎医科大学臨床腫瘍学 山口佳之先生の司会のもと、地域がん診療連携拠点病院から倉敷中央病院 総合診療科 副院長 緩和ケア専従 曾我 圭司先生が、地域の中核病院として水島協同病院 外科 山本 明広先生が、地域の診療所として医療法人東山会 伊木診療所 院長 伊木 勝道先生が、地域の保険薬局としてサンヨー薬局和気店 薬剤師 都築 泉先生が、訪問看護ステーションとして倉敷中央訪問看護ステーション 所長 柴田 由美子先生が、それぞれ発表した。

第 18 回緩和ケアフォーラム in 岡山は 2011.11.2、荒木クリニック 院長 荒木 一博先生の司会で基調講演『新見地区の在宅医療の現状～新見あんしんネットの活用～』が新見地区医師会長 医療法人緑隆会 太田病院 理事長 太田 隆正先生から発表された。また、川崎医科大学 消化器外科 教授 平井 敏弘先生の司会で特別講演『クラウド上のグループウェアを用いた在宅緩和ケアにおける情報共有の試み』が医療法人社団 鴻鵠会 理事長 城谷 典保先生から発表され、チーム医療における情報共有として、IT の重要性が討論された。

総じて、地域一体型緩和ケアネットワークの確立に向けて連携を確立して行くうえで、拠点病院の敷居の高さ、施設間の情報共有の確立の困難性、患者側の情報不足が議論された。また、今後の情報共有の在り方として、IT を利用する方向性がクローズアップされた。

D. 考察

引き続き継続議論として、年 4 回、地域一体型緩和ケアネットワークの確立に向け、それぞ

れの施設の立場から、同様の発表会を企画し、持ち回り開催することとした。同時に、インターネットを活用し、緩和ケアフォーラム in 岡山のホームページを立ち上げ、「倉敷力」を見える形で公開するべく、医師会、行政の理解のもと、すべての医療関係施設に登録フォーマットを送付し、「施設の力」を公開する活動を開始することとした。

E. 結論

地域一体型がん患者さん支援ネットワークの確立に向け、地域医療機関の顔の見える関係づくりが重要である。

G. 研究発表

- 1) 第 15 回緩和ケアフォーラム in 岡山プログラム(添付)
- 2) 第 16 回緩和ケアフォーラム in 岡山プログラム(添付)
- 3) 第 17 回緩和ケアフォーラム in 岡山プログラム(添付)
- 4) 第 18 回緩和ケアフォーラム in 岡山プログラム(添付)
- 5) 山口佳之、弘中克治、岡脇誠、山村真弘：消化器癌性疼痛に対するフェンタニルによるオピオイド鎮痛剤導入の有用性. 日消外会誌 44: 1513-1519, 2011.
- 6) 山口佳之：特集乳癌診療最前線-かかりつけ医に必要な基本知識と刻々と変化する最新 TOPICS 集. 緩和医療 疼痛緩和と医療連携. 治療 93(5) : 1287-1292, 2011.

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）なし

分担研究報告（川上）

厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業

平成 23 年度 分担研究報告書

讃岐地区における情報提供を中心とした患者支援法の研究

分担研究者 川上公宏 香川県立中央病院 血液内科部長

香川県は地理的に恵まれており、他県に比較して通院要する時間は多くを要さない。そのため各がん診療拠点病院は診療連携をあまり必要とせず、病診連携は重視されてこなかった。しかし香川県（讃岐地区）のがん患者および家族にも連続的な治療・ケアを提供することは、この地区のがん診療を行う上で必須である。医療連携パスを中心として香川県がん診療連携協議会を中心にして地域診療情報（香川県版）を作成する事となり、患者必携の配布と合わせて全県一区を目指した連携した患者支援を展開する事を目指している。また提供した情報により不安軽減等の効果が得られるかをアンケート調査を行う事で評価し、医療スタッフにもアンケート調査を行い評価を行う。

A)研究目的

「患者必携（療養手帳も含む）」および「地域医療情報（香川県版）」を提供する事により、情報不足による不安を軽減できる可能性について検討する。

ヶ月をめぐりに調査票に記入、不安の尺度測定として HADS（日本語版）を使用して評価する。「患者必携（療養手帳も含む）」および「地域医療情報（香川県版）」を提供する事により、情報不足による不安を軽減できる可能性について検討する。

B)研究方法

- ① 香川県内のがん診療情報を冊子およびインターネット上のホームページでの提供を行う。
- ② 各がん拠点病院が有する患者会の横断する合同患者会を通じて提供する。
- ③ 各がん拠点病院でがん患者に、各担当医やがんサロンの役割を担う部門から情報を提供する。
- ④ アンケート調査を行い不安軽減効果について定量を試みる

化学療法を中心に比較的長期にがん診療を受ける患者(悪性リンパ腫、肺がん、乳がん等)を対象にして、冊子による情報提供前とその後 3

(倫理面への配慮)

個人情報の管理には十分な配慮をしており、本調査に関しては施設の倫理委員会の承認を得て行っている。

C)研究結果

- ⑤ 香川県内のがん診療情報を冊子およびインターネット上のホームページでの提供を行う事に関しては、香川県がん診療連携協議会のホームページに PDF 形式でアップロードできた。
- ⑥ 各がん拠点病院が有する患者会の横断する合同患者会を通じて提供する。

がん患者によるピアカウンセリング勉強会に参加して情報提供の方法について意見を交換し、インターネットのみならず冊子体による提供の希望が多いことが確認された。

- ⑦ 各がん拠点病院でがん患者に、各担当医やがんサロンの役割を担う部門から情報を提供する。

提供方法に関してはいくつかの先例の方法を紹介するにとどめて、各がん拠点病院の方法を尊重して特に介入は行わなかった。

- ⑧ アンケート調査を行い不安軽減効果について定量を試みる

まだアンケート調査の結果をしておらず研究結果として報告できる物はないが、地域連携室、通院治療センター、各専門外来と連携して進める体制を整えた。

D)考察

現在アンケート調査を開始している段階で、まだ結果を解析する段階ではないが、アンケートを通じて情報の貴重さに気付く等の副次的な効果も認められており、有用な検討と考える。

E)結論

がん診療の情報提供は必須であり、その中に地方の情報が含まれる事は更に重要であると考ええる。地域情報（香川県版）の完成と患者必携を用いた情報提供の有用性をアンケート等を用いて検討する事は重用であり、結果の解析により更なる情報提供方法の改善に役立つことが予想される。

G)研究発表

1.論文発表

1. Hamasaki Y, Matsuoka A, Waki M, Kawakami K.: Effective treatment with rituximab for primary thrombotic thrombocytopenic purpura complicated with multiple cerebral infarctions. Rinsho Ketsueki. 2012 Mar;53(3):342-6.
2. 池添隆之、田中英夫、川上公宏、尾崎修治、名和由一郎、東 太地：ML治療のゴール MEDICAMENT NEWS (2068): 10 -12 2011

2. 学会発表

1. 多発性骨髄腫治療における末梢神経障害～単施設後方視的解析～第36回日本骨髄腫研究会総会
2. 初診時CD4細胞数50未満のAIDS患者の解析～単施設解析～日本エイズ学会誌巻:13号:4頁:462

分担研究報告（篠崎）

厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業
平成 23 年度 分担研究報告書

広島県におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究

研究分担者 篠崎勝則 県立広島病院 臨床腫瘍科主任部長

がん医療においては、安全で良質ながん化学療法の提供のみならず、がんの診断時点から終末期までのがん患者への積極的で継続的なケア支援が望まれている。次期がん対策基本計画においては、「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」に向けたがん医療の推進が示された。その中では、地域連携や在宅医療・介護サービスについては、地域完結型の医療・介護サービスを提供できる体制の整備、各制度の適切な運用とそれに必要な人材の育成が求められている。様々な職種からなるがん医療チームが提供する医療サービスの方向性の統一や有機的な連携には、適切な情報ハブが重要な役割を果たすと考えられる。

平成 23 年度の研究目的は、以下の二点である。一点は、患者必携と広島県版「がん患者さんのための「地域の医療情報」サポートブックの周知・普及である。県立広島病院が開催、共催する平成 23 年度の研修会や講演会において、医師、看護師、薬剤師、訪問看護従事者や一般市民を対象に、患者必携と広島県版「がん患者さんのための「地域の療養情報」サポートブックの周知を実施した。もう一点は、「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」を目標に、広島県地域がん診療連携拠点病院である県立広島病院の特性と通院患者動向に応じた、がん患者に対する社会的支援や情報提供の普及体制の構築である。当院での薬薬連携に焦点を当てて、がん医療において薬剤師に求められるものは何かを明確化し、さらに薬剤師ががん患者支援を実施する場合の情報ハブとしての自立支援型がん情報の有用性を評価した。薬剤師へのアンケートでは、86%が患者必携や広島県版「がん患者さんのための「地域の医療情報」サポートブックを知らないとの回答であった。がんの医療情報を求めるがん患者に良質かつ適切な情報が伝わるためには、我々ががん医療従事者自らが良質な情報を有することも必要である。「患者や家族に服薬指導・説明のときに患者必携に含まれる情報を活用したいと思うか」という質問に対し、「患者必携」、「地域の療養情報サポートブック」を「絶対活用したい」が、それぞれ 43.2%、34.1%、「ときどき活用したい」がそれぞれ 43.2%、56.8%と、その意義が強く示唆された。このような情報媒体は、がん医療従事者の情報共有ツールとなる可能性を有しており、より効果的な薬薬連携や服薬指導の展開に有用であることが示唆された。

A. 研究目的

平成 19 年策定のがん対策基本計画では、がん医療に関する相談支援及び情報提供が取り組むべき施策として盛り込まれた。がん医療においては、身体的・精神的・社会的問題といっ

た様々な問題に対する幅広い情報と解決策が求められている。

患者やその家族が必要とする、住み慣れた地域の療養に関する情報を整備・提供する必要があると考え、当研究班の一員として広島県がん

対策課、広島県がん対策推進協議会・がん患者支援部会に提言した。平成 22 年度は患者必携の地域版として広島県版「がん患者さんのための「地域の療養情報」サポートブックの作製に協力し、平成 23 年度その配布開始に至った。また、がんと診断された患者の思いに寄り添い、支えることを目指して、信頼できる情報をわかりやすく、役に立つものとして、患者必携「がんになったら手にとるガイド」（以下：患者必携）が平成 23 年 3 月に書籍化された。今後はこれら二つに含まれる情報の普及と評価が求められる。

当該研究 2 年目の平成 23 年度の目的は、以下の二点である。一点は、患者必携と広島県版「がん患者さんのための「地域の療養情報」サポートブックの周知・普及である。もう一点は、「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」を目標に、広島県地域がん診療連携拠点病院である県立広島病院の特性と通院患者動向に応じた、がん患者に対する社会的支援や情報提供の普及体制促進の構築である。当院での薬薬連携に焦点を当て、がん医療において薬剤師に求められるものは何かを明確化し、さらに薬剤師ががん患者支援を実施する場合の情報ハブとしての自立支援型がん情報の有用性を評価した。

B. 研究方法

県立広島病院が開催、共催する平成 23 年度の研修会や講演会において、医師、看護師、薬剤師、訪問看護従事者や一般市民を対象に、患者必携と広島県版「がん患者さんのための「地域の医療情報」サポートブックの内容に関して周知を行うと共に、その活用の仕方について具体的に説明することを図った。

県立広島病院がん医療従事者研修会として、「外来化学療法での薬薬連携の重要性と今後のあり方」と題した研修会を企画し、シンポジ

ウム形式にて現在のがん医療において薬剤師に求められるものは何かを明確化する。さらに薬剤師ががん患者支援を実施する場合の情報ハブとしての自立支援型がん情報の有用性を評価するために、アンケート調査を実施した。実施に当たっては個人情報保護に十分配慮し、医療・介護従事者などががん患者支援者を対象とした調査実施に対しては、個人が特定できないような調査方法への配慮と収集したデータの管理と解析データの切り離しを行うなど、情報保護を徹底した。

C. 研究結果

県立広島病院の特性や患者動向に応じた、がん患者に対する社会的支援や情報の活用促進に向けた研究

当院が関連している調剤薬局勤務の薬剤師を対象とし、当院が開催している県立広島病院がん医療従事者研修会にて「外来化学療法での薬薬連携の重要性と今後のあり方」と題した研修会を平成 23 年 7 月 12 日（火）19 時 00 分から 20 時 30 分まで実施した（参加者 135 名、うち薬剤師 93 名）。その中で、県立広島病院薬剤科主任 今津邦智氏より「医療連携推進のための情報共有化について～病院薬剤師の立場から」、ハート薬局中央店 宇留野雅史氏より「医療連携推進のための情報共有化について～薬局薬剤師の立場から」、県立広島病院臨床腫瘍科主任部長 篠崎勝則氏より「外来化学療法における薬薬連携で求められるもの～患者必携を介した薬薬連携の推進への取り組み」といった 3 つの講演を行い、シンポジウム形式にて現在のがん医療において薬剤師に求められるものは何かを明確化した。行政としても、厚生労働省医政局長通知（医政発 0430 第 1 号）にあるように、チーム医療の推進、がん患者・家族への情報提供を行う医療者として薬剤師も重

要な役割を担う事が期待されていることを周知した。今後がん患者の服薬指導を実施する上で、化学療法やがんの増悪などによる日常生活での問題点を薬剤師の立場から把握し、適切なアドバイスや服薬指導、電話による主治医への疑似照会や情報のフィードバックを実施していく姿勢を確認した。

平成 23 年 9 月 3 日県立広島病院で病診連携カンファレンス「みんなでつくろう、がん治療の輪」を開業医、訪問看護ステーション、調剤薬局等の医療従事者向けに開催した(参加者 55 名)。その中で、渡邊清高氏により基調講演「がんになったら手に取るガイドの取り組みと地域での連携に向けた動き」を頂き、周知に努めた。さらに、広島県健康福祉局がん対策課・武田直也氏から「広島県がん対策の現状と今後の取り組みについて」、県立広島病院・篠崎勝則氏から「県立広島病院におけるがん治療(化学療法と在宅ケア)の現状と展望」と題し現状報告がなされ、がん患者支援のための地域ネットワークのあり方について論議した。研修会後のアンケート調査では、患者必携や地域の情報サポートブックに関しては、在宅ケアを展開する上で患者の不安解消に役立つ、医療従事者にも役立つとの意見が多かった。今後より良い在宅ケアを展開する上で、開業医としてどう関わられるかも地域連携に協力したいとの感想もあった。基幹病院の中に地域サポートチームを作り、地域の在宅医療との連携や指導・相談できる仕組みの構築や在宅医の教育システムが必要との建設的な意見も寄せられた。

平成 23 年 10 月 29 日 2 次広島医療圏の 5 つのがん診療連携拠点病院が共催する「がん診療連携拠点病院共催市民講演会」(参加者 296 名)の中で、「患者必携 がんになったら手に取るガイド」を市民向けに紹介し、さらにそれを活用した、外来がん治療を受ける方へのポイントについての講演を取り入れた。

自立支援型がん情報の有用性の評価と支援施策の評価と広島県地域がん診療連携拠点病院である県立広島病院の特性と通院患者動向に応じた、がん患者に対する社会的支援や情報提供の普及体制の構築

平成 23 年 7 月 12 日「外来化学療法と薬薬連携」をテーマに実施した県立広島病院がん医療従事者研修会(別紙 2)の参加者は計 135 名(薬局薬剤師 82 名、病院薬剤師 11 名、医師 22 名、看護師 10 名、事務職 10 名)であった。薬局薬剤師 82 名に、「患者必携」完成版と「がん患者さんのための『地域の医療情報』サポートブック(患者必携 地域の医療情報広島版)」を無料配布し、その有用性について研究班企画のアンケート調査を施行した。アンケート回収は郵送としたが、回収率は 53.7%であった。

「患者必携を知っていましたか?」では、86%が知らないという回答であった(図 1)。「患者や家族に服薬指導・説明のときに患者必携に含まれる情報を活用したいと思うか」という質問に対し、「患者必携」、「地域の療養情報サポートブック」を「絶対活用したい」が、それぞれ 43.2%、34.1%、「ときどき活用したい」がそれぞれ 43.2%、56.8%と、その意義が強く示唆された。また、患者必携のどの部分を活用するかに関しては、5 割以上が、がん情報の集め方、治療までに準備しておきたいこと、費用と助成、薬物療法、日常生活でのヒントと回答した。どこが不安の軽減に役立つかに関しては、がんと言われたあなたの心に起こること、自分らしい向かい合い方とは、患者同士の支え合いの場を利用しましょう、痛みを我慢しないなどの部分であった(図 2)。

D. 考察

患者必携「がんになったら手に取るガイド」

(以下：患者必携) が平成 23 年 3 月に書籍化され、また平成 23 年度より患者必携の地域版として広島県版「がん患者さんのための「地域の医療情報」サポートブック」が配布されている。薬剤師へのアンケートでは、86%が知らないとの回答であった。がんの医療情報を求めるがん患者に良質かつ適切な情報が伝わるためには、我々ががん医療従事者が良質な情報を有することも必要である。「患者や家族に服薬指導・説明のときに患者必携に含まれる情報を活用したいと思うか」という質問に対し、「患者必携」、「地域の療養情報サポートブック」を「絶対活用したい」が、それぞれ 43.2%、34.1%、「ときどき活用したい」がそれぞれ 43.2%、56.8%と、その意義が強く示唆された。このような情報媒体は、がん医療従事者の情報共有ツールとなりうるポテンシャルを有しており、より効果的な薬薬連携や服薬指導の展開に有用であると考えられた。平成 24 年度はがん患者を対象にその目的・活用方法等についての啓蒙活動やアンケート調査を計画している。

E. 結論

がん情報の周知・普及活動において、行政との連携のもと地域の特性や患者動向に応じた講演会・研修会あるいはがん情報発信を通じて地域ネットワークを構築していくモデルとして薬薬連携を提案した。また、研究班企画のアンケート調査結果を研究班全体に還元することにより地域の特徴を提示した。今後、利用者としての患者・家族からの有用性や情報の充足感について得た評価をもとに、患者視点での有用な情報が明確化され、今後医療情報誌の更新に役立つことが期待される。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

【欧文原著】

- 1) Doi M, Okamoto Y, Yamauchi M, Naitou H, Shinozaki K. Bleomycin-induced pulmonary fibrosis after tumor lysis syndrome in a case of advanced yolk sac tumor treated with bleomycin, etoposide and cisplatin (BEP) chemotherapy. *Int J ClinOncol*. 2011 Nov 30. [Epub ahead of print]
- 2) Kubo T, Shimose S, Matsuo T, Fujimori J, Sakaguchi T., Yamaki M, Shinozaki K, Woo S, Ochi M. Oncolytic Vesicular Stomatitis Virus Administered by isolated limb perfusion suppresses osteosarcoma growth. *J Orthop Res*. May;29(5):795-800, 2011.

【邦文原著】

- 1) 小橋俊彦 中原英樹 大森一郎 大石幸一 池田聡 真次康弘 漆原貴 篠崎勝則 板本敏行 大腸癌肝転移に対する肝切除例の検討 *広島医学* 64 (10) :433-436, 2011.
- 2) 山内理海 篠崎勝則 畑中信良 山本学 田邊和照 檜原啓之 平林直樹 二宮基樹 広島県内における胃癌化学療法の実態調査. *癌と化学療法* 38 (6): 941-944, 2011.
- 3) 篠崎勝則. 「抗癌剤投与に関する現況と課題・薬剤師の役割」 *外来癌化学療法* 2 (2): 9-13, 2011. メディカルレビュー社

2. 学会発表

【国際学会発表】

- 1) M. Yamauchi, K. Shinozaki, M. Doi, K. Hamai. Three cases of advanced gastric cancer successfully managed with trastuzumab-containing chemotherapy. The 21st HCS - The 5th Three Universities' Consortium, International Symposium, Hiroshima. Poster Session 2011/11/6

【国内発表】

- 1) 土井美帆子 角舎学行 秋本悦志 野間翠 濱井宏介 山内理海 篠崎勝則 当院における Intrinsic subtype 別の転移・再発乳がんについての検討 第41回広島乳腺疾患研究会 2011/4/2
- 2) 篠崎勝則 あらためて抗がん剤治療を考える とまーれ市民公開講演会 2011/5/29
- 3) 篠崎勝則 シンポジウム「消化器癌化学療法の適応と限界と展望」第95回日本消化器病学会中国支部例会 座長 2011/6/18
- 4) 篠崎勝則 薬剤師の視点からの「患者必携」ならびに「地域の医療情報サポートブック」の有用性の評価と薬薬連携の推進 県立広島病院がん医療従事者研修会 2011/7/12
- 5) 篠崎勝則 山内理海 濱井啓介 土井美帆子 池田聡恵木浩之 板本敏行 H3 肝転移を有する4期大腸がんにおける手術療法の意義に関する検討 第9回日本臨床腫瘍学会学術総会 2011/7/21
- 6) 濱井啓介 篠崎勝則 山内理海 土井美帆子 和田崎晃一 高齢者における局所進行食道癌に対する化学放射線療法の有効性、安全性の検討 第9回日本臨床腫瘍学会学術総会 2011/7/22
- 7) M. Yamauchi, K. Shinozaki, K. Hamai, M. Doi. Gemcitabine plus cisplatin chemotherapy for patients with biliary tract cancer. 第9回日本臨床腫瘍学会学術総会 2011/7/21
- 8) M. Doi, M. Kamitsuna, M. Funaki, K. Hamai, M. Yamauchi, K. Shinozaki. Drug-induced interstitial pneumonia in outpatients receiving chemotherapy 第9回日本臨床腫瘍学会学術総会 2011/7/21
- 9) 篠崎勝則 抗癌剤副作用対策の最前線 広島県病院薬剤師会呉支部研修会 2011/9/8
- 10) 濱井啓介 篠崎勝則 山内理海 土井美帆子 和田崎晃一 当院における食道癌に対する根治的化学放射線療法の治療成績 第101回広島がん治療研究会 2011/9/24
- 11) 篠崎勝則 山内理海 濱井宏介 池田聡板本敏行 土井美帆子 県立広島病院におけるステージ4期大腸癌の治療成績についての検討 第49回日本癌治療学会学術集会 2011/10/27
- 12) 今津邦智 篠崎勝則 重村裕 中田恭子 高岡正宣 岡嶋由希子 尾花千絵 迎川ゆき 木下真由美 山内理海 土井美帆子 臨床腫瘍科外来における薬剤師業務の現状と課題 第49回日本癌治療学会学術集会 2011/10/29
- 13) 尾花千絵 岡嶋由希子 迎川ゆき 木下真由美 重村裕 中田恭子 今津邦智 濱井宏介 山内理海 土井美帆子 篠崎勝則 臨床腫瘍科における有害事象に対する電話トリアージシステムの構築 第49回日本癌治療学会学術集会 2011/10/29
- 14) 渡邊清高 清水秀昭、篠崎勝則、篠田雅幸、岡本直幸、照井隆広、岡部健、今井博久、田城孝雄、山口佳之、元雄良治、川上公宏、北村周子、辻晃仁、増田昌人 "患者必携「地域の療養情報」—地域におけるがん対策に資する介入モデルの作成— 第70回日本公衆衛生学会総会 2011/10/21
- 15) 山崎由美子 浦久保安輝子、平野真紀、伊藤照生、篠崎勝則、渡邊清高 地域連携における自立支援型がん情報の活用と薬剤師が担うべき情報提供支援の可能性についての検討 第6回医療の質・安全学会学術集会 2011/11/20
- 16) 篠崎勝則 ここまで進歩した外来がん化学療法 第3回がん診療連携拠点病院共催市民講演会口演 2011/10/29
- 17) 篠崎勝則 大腸癌化学療法におけるチーム

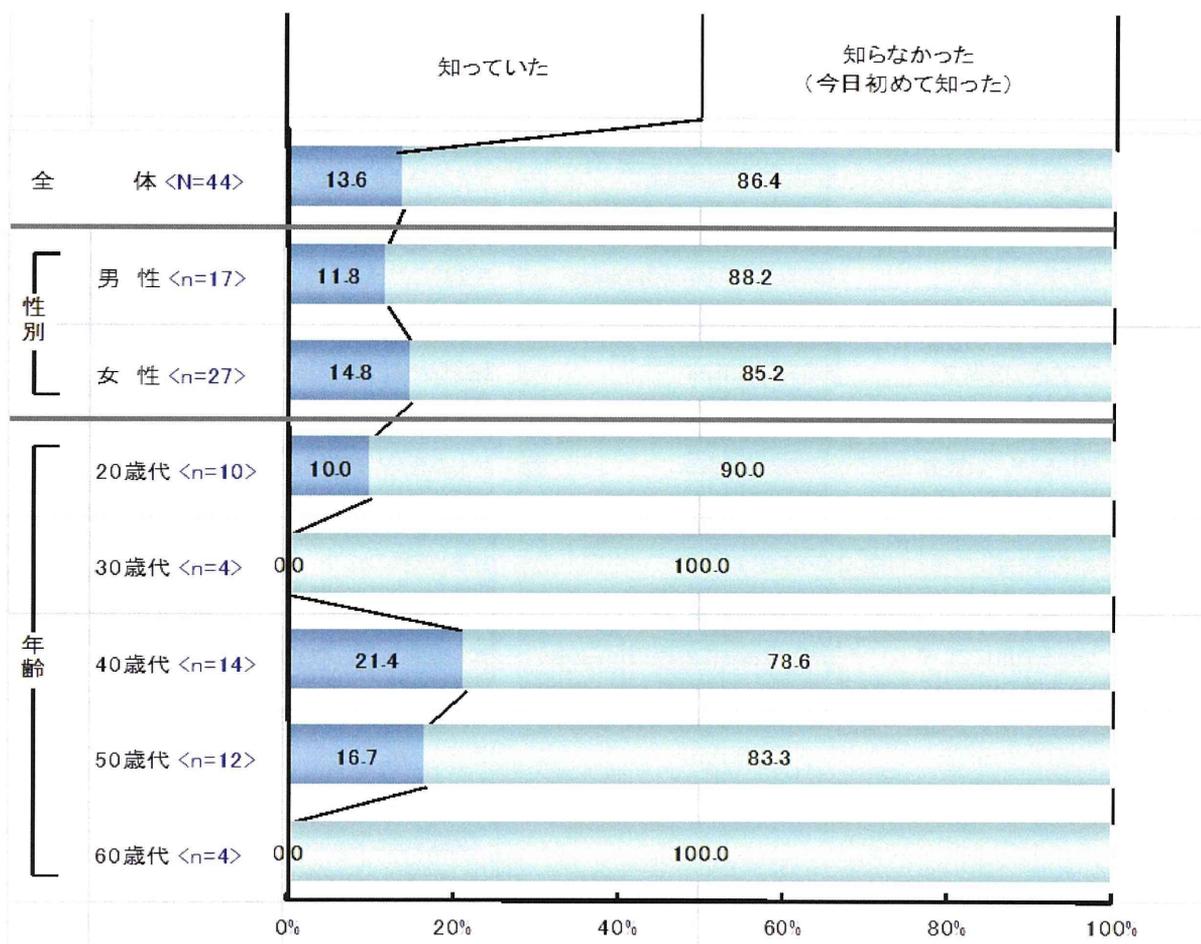
医療：標準治療の必要性について JA 尾道
総合病院オープンカンファレンス
2011/11/1

- 18) 篠崎勝則 最新の抗がん剤治療 平成23年
度第4回市民のためのがん講座・患者支援
ネットワーク広島 2011/11/27
- 19) 篠崎勝則 当院における在宅ケアの実際と
今後の展望 広島在宅緩和ケア勉強会
2011/12/5
- 20) 篠崎勝則 大腸がん治療の変遷～分子標的
薬を中心に～ 第1回高知腫瘍分子標的治
療セミナー 2011/12/6
- 21) 篠崎勝則 最新の抗癌剤副作用対策と在宅
ケア 第19回尾三地域がん連携フォーラム
2012/1/19
- 22) 篠崎勝則 患者視点に立った在宅ケアの展
開 平成23年度第5回県立広島病院がん医
療従事者研修会 2012/1/24
- 23) 篠崎勝則 県立広島病院における大腸がん
化学療法の実際 沖縄がんチーム医療ワー
クショップ 2012/3/3
- 24) 篠崎勝則 当院における外来化学療法と在
宅ケア支援に関する取り組みと今後の展望
金沢医科大学がんプロフェッショナル養成
講座（能登地区がん診療連携拠点病院研修
会・恵寿総合病院） 特別講演 2012/3/24

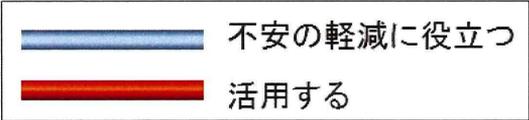
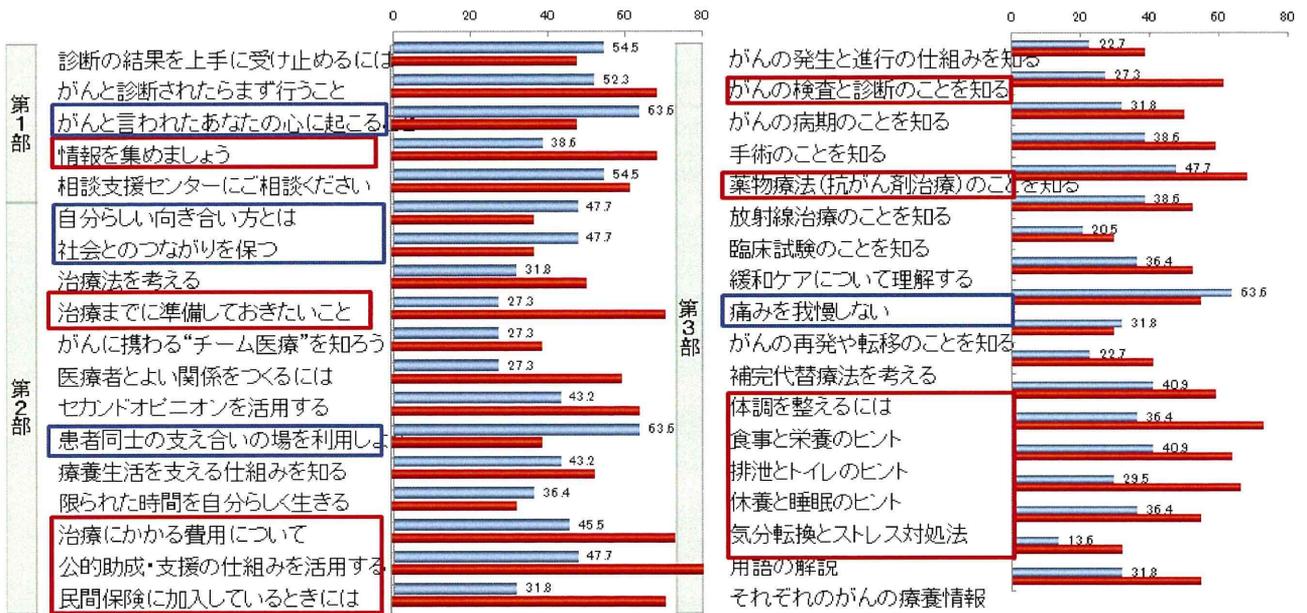
H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許の取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他

【図1】



【図 2】



分担研究報告（北村）

厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業
平成 23 年度 分担研究報告書

地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究
「患者必携（三重版）」の普及に向けて

分担研究者 北村周子 財団法人三重県健康管理事業センター
(三重県がん相談支援センター)センター長

三重県では、県内にがんセンターがないことや交通の利便性などから生活圏と医療圏が異なる地域が複数ある。県民の受療動向を把握し、入院期間の短縮や外来治療が主流になったことにより地域で療養するがん患者やがんサバイバーを視野に入れた総合的な支援に取り組んでいる。平成 21 年度、県民に必要ながん情報を集約した「がんと向き合うために（患者必携三重県版）」を作成した。平成 22 年度は、県内がん診療連携拠点病院等においてがん患者に配布するとともに、その利用者・情報提供に関わった関係者等を対象にアンケート調査を行った。

その結果、利用者から「役に立ちそう」、「内容についてはわかりやすい」という肯定的な回答を得た。情報提供に関わった関係者からは、普及には医療者・利用者への周知・広報の必要性及び配布方法の検討が課題として挙げられた。

平成 23 年度は、「患者必携 がんになったら手に取るガイド」と「がんと向き合うために(患者必携三重県版)」を、地域の医療提供体制及びがんの病期・部位などの異なる特性を持ったグループに試験配布し、それぞれが必要とする情報の集約、ならびに情報提供ツールの普及にむけた検討を行う。

A. 研究目的

三重県は、がん専門病院がないこと、南北に長い地形で交通の利便性などから生活圏と医療圏が異なるという地域特性がある。

このような状況に、がん患者・家族を総合的かつ広域的に支援する体制の整備が必要ということから平成 20 年 1 月に、県庁舎内に三重県がん相談支援センター（以下、本センター）が開設された。本センターは、「がん相談」に加え「がんに関する情報の収集及び提供」を事業として掲げ、ワンストップでがんに関する相談や情報提供を行っている。

がん患者・家族が情報提供ツール「患者必

携」を活用することで、病気についての理解を深め、納得した治療選択ができるように自立支援を目指し、平成 21 年度の「がん相談」の内容から三重県のがん患者・家族に必要な情報を抽出し、それらを集約した「がんと向き合うために（患者必携三重県版）」を作成した。平成 22 年度は本冊子を配布、患者及び作成・配布等に関わった関係者を対象とした評価アンケートを実施した。患者からの回答では、「役立った」「わかり易かった」という肯定的な評価を得た。また、関係者からは、自立支援のための情報提供ツールの必要性についての理解ならびに情報提供ツールとしての認知を広げるための検